

第1部 保育士、幼稚園教諭等を対象とした自然体験活動等に関するアンケート調査

1 調査概要

【調査目的】

国立青少年教育振興機構は、青少年教育施設や地方公共団体等を中心として、学校、青少年団体、企業、民間教育機関・団体等、NPO 法人等が連携し、地域に様々な体験活動の普及を目指す「体験の風をおこそう」運動を推進する、地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業の公募を実施している。平成 27 年度、国立若狭湾青少年自然の家が中心となり、福井県嶺南地域の近隣の青少年教育施設や関係団体等が連携し、『若狭の海湖山から「体験の風をおこそう」運動推進実行委員会』を組織し、公募に地域全体で体験活動を推進する取り組みを企画・提案し、採択された。

その取り組みの一環として、小浜市民生部社会福祉課、小浜市教育員会、小浜市保育園・幼稚園全 12 園と連携し、より低年齢期からの自然体験活動の普及を目指し、その保育士、幼稚園教諭等など幼児に関わる「幼児の自然体験活動指導者養成研修」と年長児を対象とした日帰りの自然体験活動事業「わかさわん うみはともだち」を企画・提案している。

上記 2 事業は、新規の試みであり、事業を実施するにあたって、地域の現状を把握するための調査を実施したいと考えた。そこで、本年度は、小浜市内の保育士、保育教諭、幼稚園教諭を対象に、これまでの自然体験や日常生活での経験、自然体験活動に対するイメージ、事業に対する期待などを調査し、小浜市内の保育士、幼稚園教諭等の自然体験活度に関する現状を明らかにし、今後の事業展開の基礎資料を得るために、本調査を実施することとした。

【調査内容】

- ・これまでの自然体験
- ・日常生活の中での経験
- ・自然体験活動に対するイメージ
- ・子供にさせたい体験
- ・指導者養成研修に期待すること
- ・幼児の自然体験活動事業に期待すること

【調査対象】

小浜市内の保育園・幼稚園に勤務する保育士、保育教諭、幼稚園教諭

表1 本調査の対象者

	男性	女性	合計
20代	2	50	52
30代	0	36	36
40代	0	30	30
50代以上	2	33	35
合計	4	149	153

※ 調査対象者には、小浜市内の保育園、こども園、幼稚園13園に勤務する保育士、保育教諭、幼稚園教諭以外に、小浜市児童教育センター、子育て支援センター、小浜市母と子の児童発達支援センターに勤務する8名からも回答を得ている。

(参考)

小浜市内の保育園、こども園、幼稚園に勤務する保育士、保育教諭、幼稚園教諭
169名

本調査に回答を得た小浜市内の保育園、こども園、幼稚園に勤務する保育士、保育教諭、幼稚園教諭

145名 (153名 - 8名)

回収率 85.8%

【調査実施期間】

平成27年7月1日 小浜市の幼稚園・保育園園長会議において調査概要説明
調査票の配布

平成27年7月23日 調査票の回答期限

【調査方法】

調査は、小浜市教育委員会、小浜市民生部社会福祉課の協力を得て実施した。各幼稚園、保育園等で調査票を配布し、回答期限までに記入し、各園でとりまとめ、小浜市民生部社会福祉課に提出するようにした。

2 調査結果

【自然体験について】

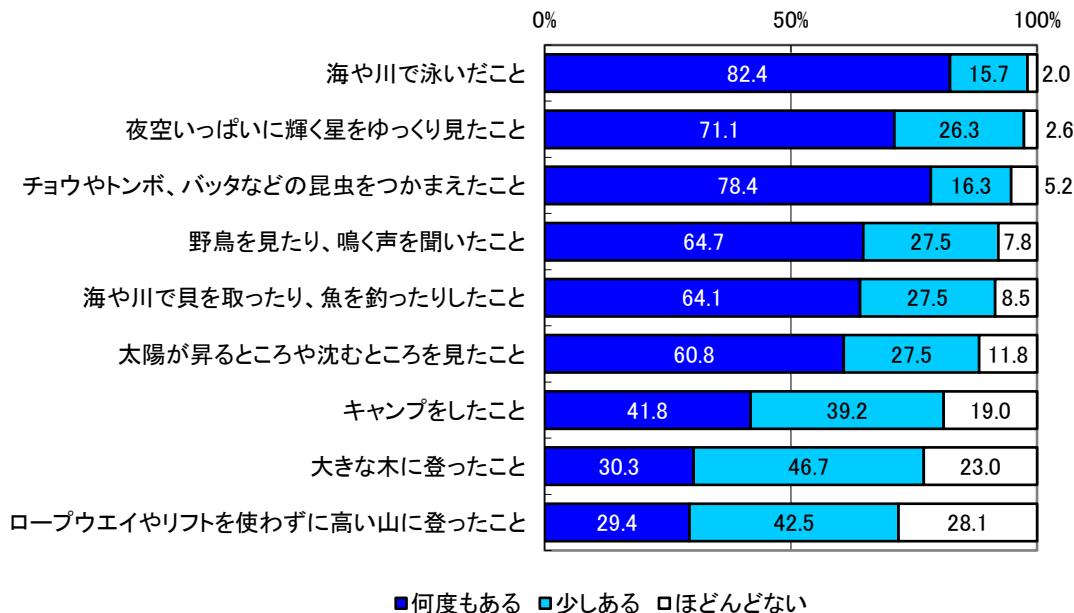
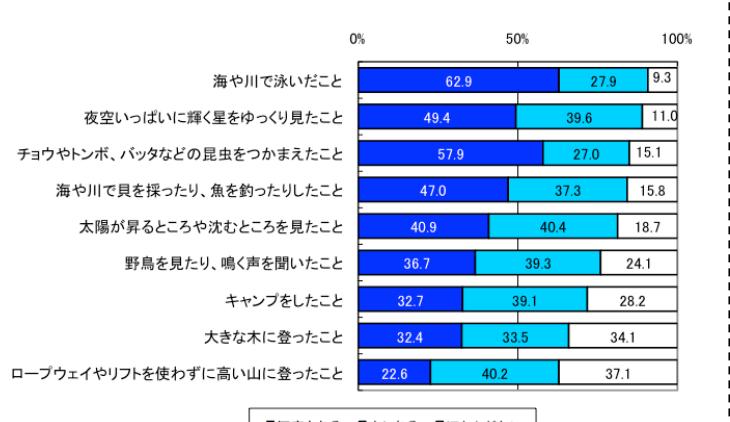


図1 自然体験の実態

自然体験について、これまでにどれくらいしたことがありますかという問い合わせ、「何度もある」、「少しある」、「ほとんどない」の3件法で質問した。「何度もある」、「少しある」と答えた割合は、「大きな木に登ったこと」、「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」以外は、8割以上である。特に「海や川で泳いだこと」、

「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」については、97%を超えており、多くの人がこうした体験をこれまでにしたことがあると答えている。また、国立青少年教育振興機構が実施した青少年の体験活動等に関する実態調査（平成24年度調査）の保護者を対象とした調査結果と比べて見てみると、どの体験についても「何度もある」、「少しある」と答えた割合が10%ほど高くなっている。調査対象の違いや調査対象となっている年代が異なるため、単純に比較はできないかもしれないが、美しい山、き



(参考) 「青少年の体験活動等に関する実態調査」保護者調査の自然体験の実態

れいな海、澄んだ川が近くにあるという、自然豊かな小浜市や若狭地域の特性が出ているのではないかと考えられる。

(年代別)

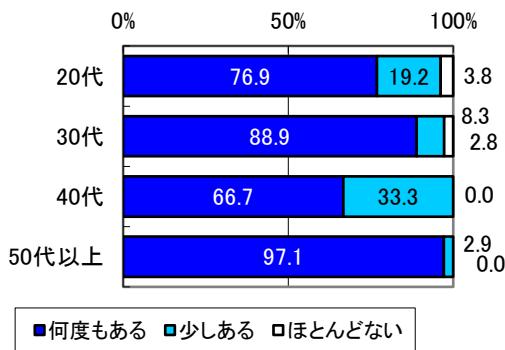


図2 海や川で泳いたこと

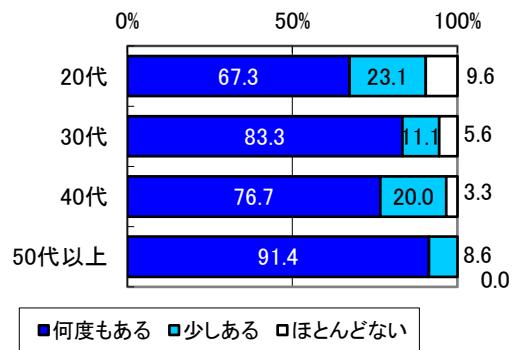


図3 チョウやトンボ、バッタなどの昆虫

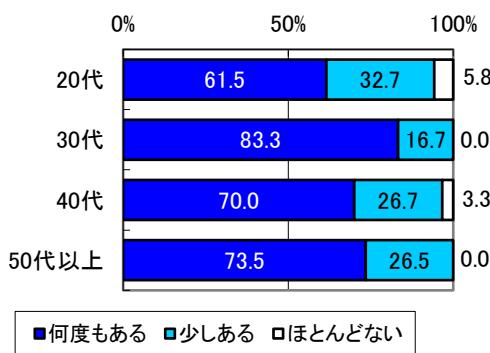


図4 夜空いっぱいにかがやく星をゆっくり見たこと

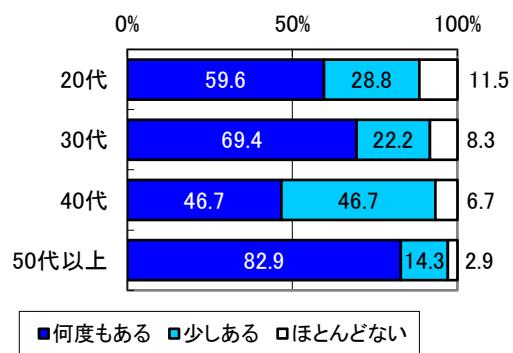


図5 野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと

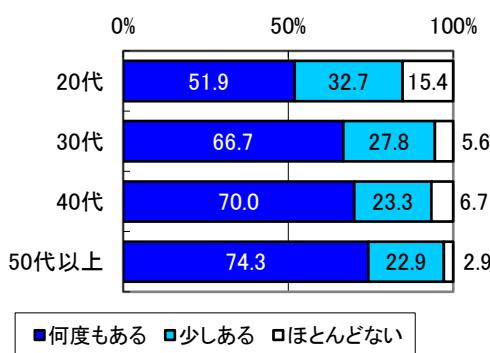


図6 海や川で貝を取ったり、魚を釣ったりしたこと

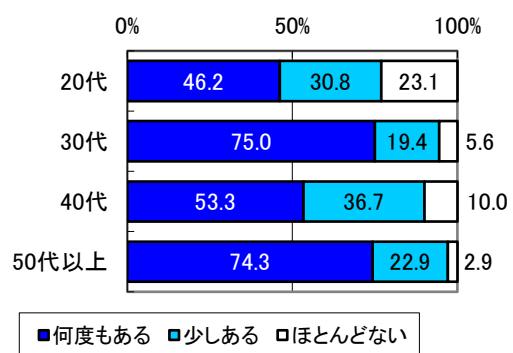


図7 太陽が昇るところや沈むところを見たこと

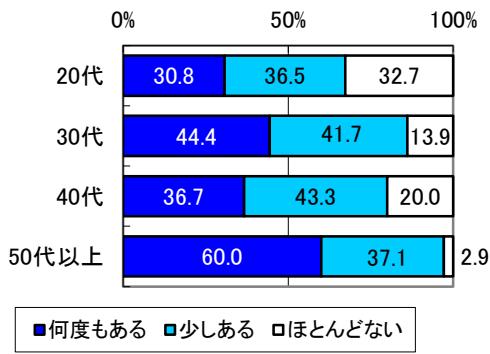


図8 キャンプをしたこと

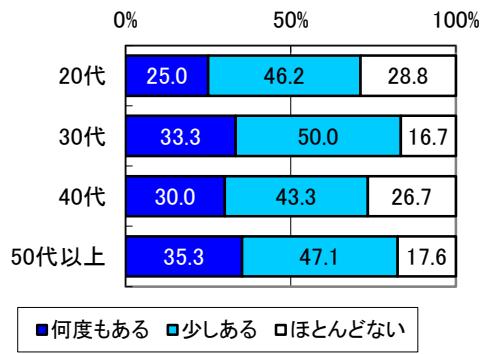


図9 大きな木に登ったこと

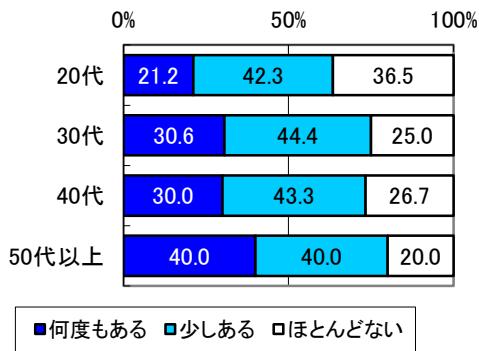


図10 ロープウェイやリフトを使わずに
高い山に登ったこと

年代別に見てみると、ほとんどの体験で世代が上がるほど「何度もある」、「少しある」と答えた割合が多い傾向が見られた。「海や川で貝を取ったり、魚を釣ったりしたこと」、「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」のように、これまでにしたことがある割合が高い体験の方が、世代が下がるほど、「何度もある」、「少しある」と答えた割合が低い傾向が見られる。

【生活の中での経験】

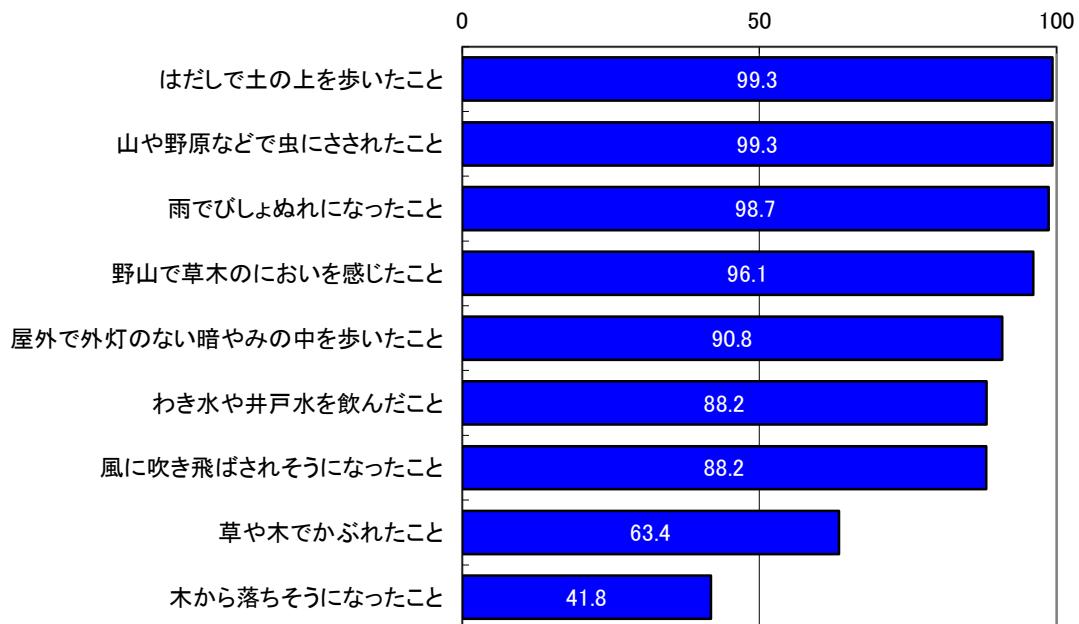


図11 これまでの生活における経験について「ある」と答えた割合

これまでの生活やふだんの生活における経験について、経験したことが「ある」、「ない」の2件法で質問した。「ある」と答えた割合は、「草や木でかぶれたこと」、「木から落ちそうになったこと」以外は、8割以上であった。「木から落ちそうになったこと」については、4割程度であった。

調査項目については、国立オリンピック記念青少年総合センターが平成16年度に実施した「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」を用いた。その調査においても「木から落ちそうになったこと」のように、自分から進んで自然とかかわらなければ経験できないことの割合が低い結果が出ていたが、本調査でも同様の結果が見られた。

(年代別)

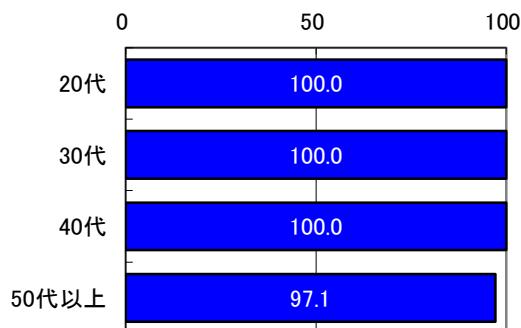


図12 「はだしで土の上を歩いたこと」

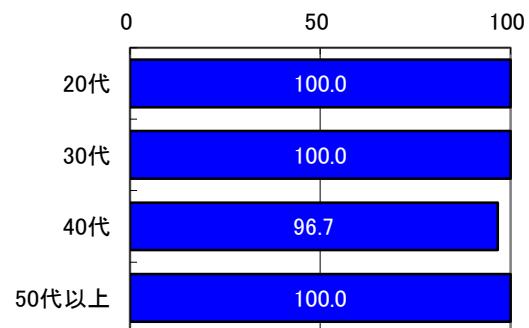


図13 「山や野原などで虫にさされたこと」

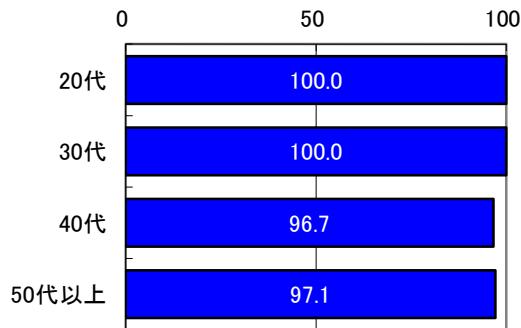


図14 「雨でびしょぬれになったこと」

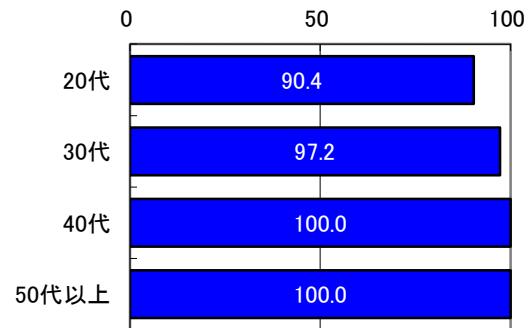


図15 「野山で草木のにおいを感じたこと」

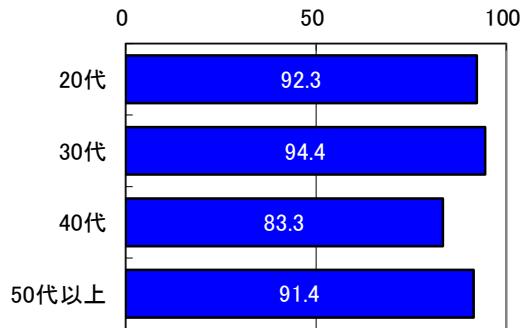


図16 「屋外で外灯のない暗やみの中を歩いたこと」

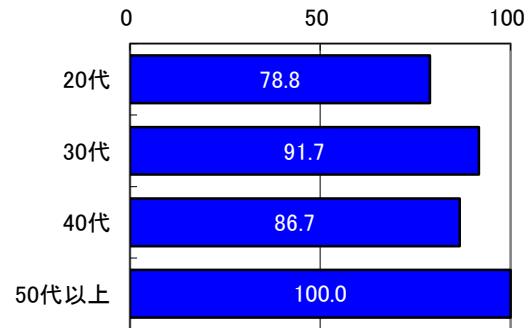


図17 「わき水や井戸水を飲んだこと」

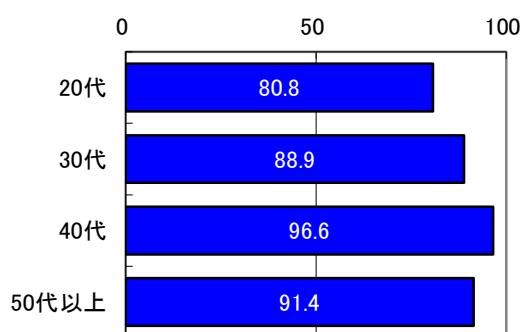


図18 「風に吹き飛ばされそうになつたこと」

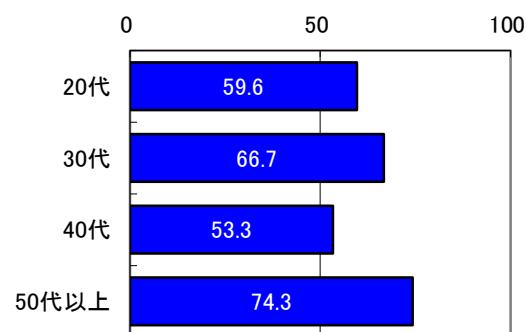


図19 「草や木でかぶれたこと」

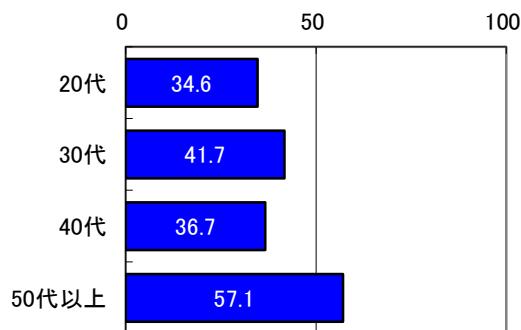


図20 「木から落ちそうになつたこと」

年代別にみると、世代が上がるほど「ある」と答えた割合が高い傾向が見られる。「わき水や井戸水を飲んだこと」について「ある」と答えた割合は、50代以上は全員があると答えているが、20代では、8割程度となっている。

【自然体験活動に対するイメージ】

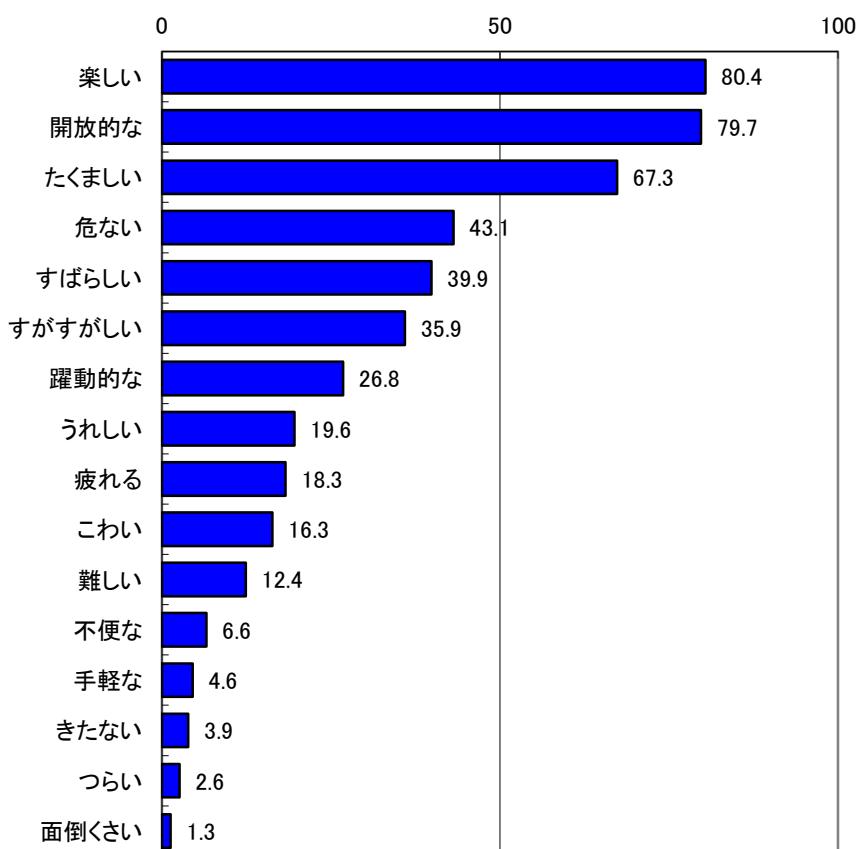


図21 自然体験活動に対するイメージ

自然体験活動に対するイメージについて、「あてはまるもの」を複数回答で質問した。「あてはまる」と答えた割合の高い順に、図21に示している。全16項目の中で、「楽しい」、「開放的な」を選択した割合は8割程度あり、「たくましい」を選択した割合は7割程度であった。全体的に自然体験活動に対するイメージは、肯定的なイメージの割合が高い傾向が見られる。

調査項目については、国立オリンピック記念青少年総合センターが平成16年度に実施した「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」を用いた。自然体験活動に対する肯定的なイメージで捉えていることは、今回の調査においても同様の傾向が見られる。

今回の調査では「危ない」と答える割合が4割程度あり、参考にした調査の結果（保護者を対象とした調査結果で、「危ない」と答えた割合は13～15%割程度）と比べると高い割合を示している。子どもたちと関わる幼稚園教諭や保育士を対象として調査を実施したため、ふだんから安全管理に対する意識が高いことから、こうした傾向が

見られるのではないかと考える。

(年代別)

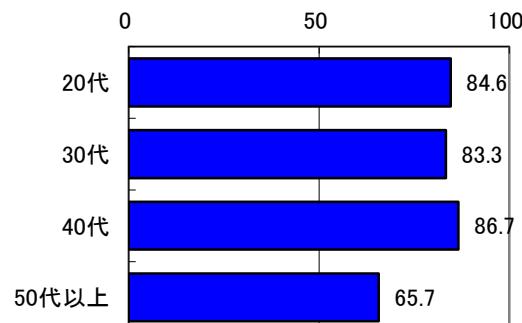


図22 自然体験活動に対するイメージ
「楽しい」

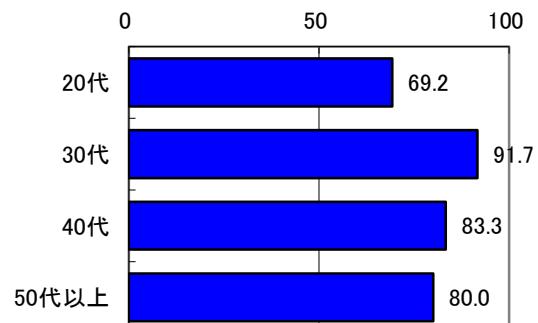


図23 自然体験活動に対するイメージ
「開放的な」

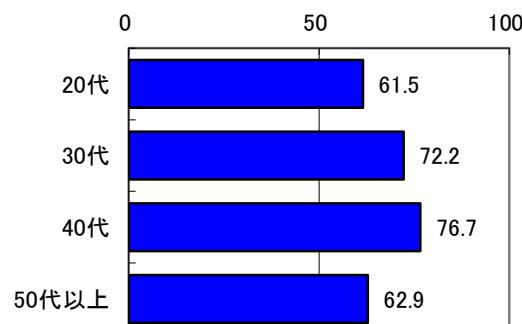


図24 自然体験活動に対するイメージ
「たくましい」

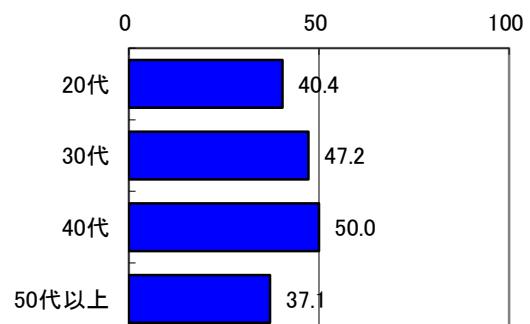


図25 自然体験活動に対するイメージ
「危ない」

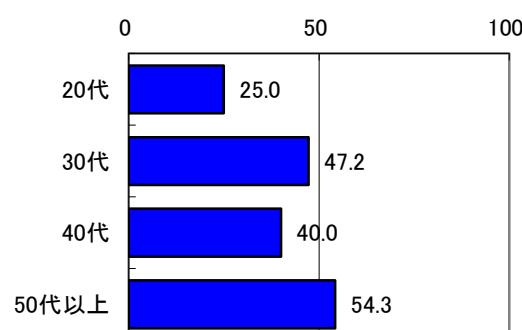


図26 自然体験活動に対するイメージ
「すばらしい」

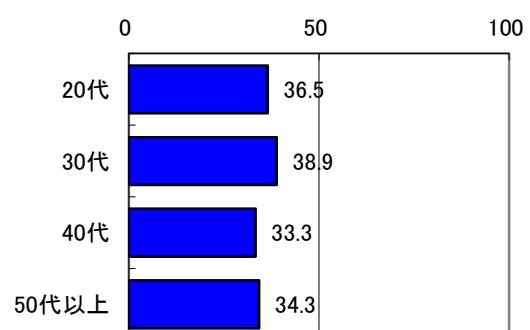


図27 自然体験活動に対するイメージ
「すがすがしい」

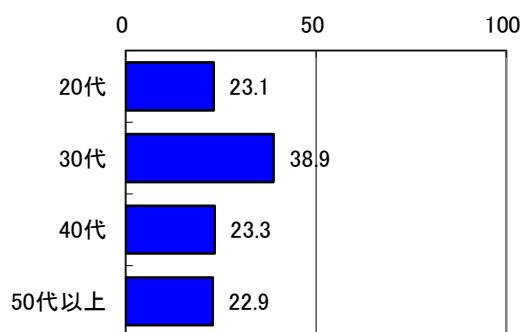


図28 自然体験活動に対するイメージ
「躍動的な」

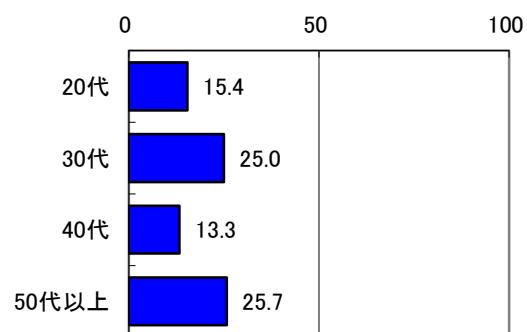


図29 自然体験活動に対するイメージ
「うれしい」

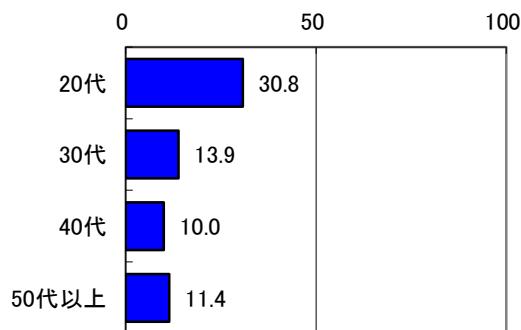


図30 自然体験活動に対するイメージ
「疲れる」

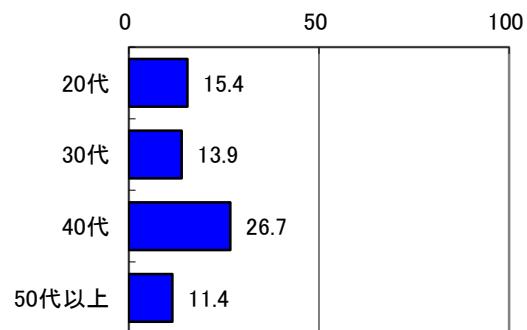


図31 自然体験活動に対するイメージ

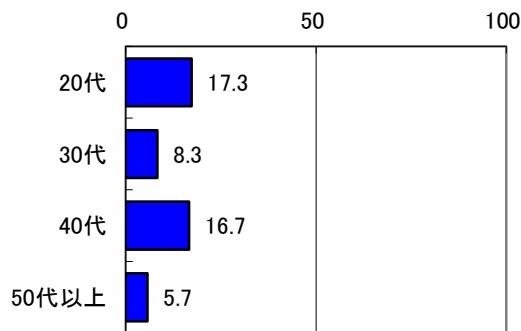


図32 自然体験活動に対するイメージ
「難しい」

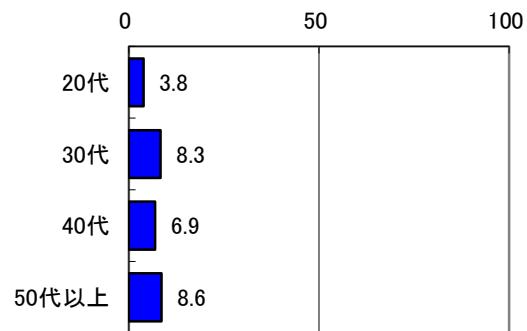


図33 自然体験活動に対するイメージ
「不便な」

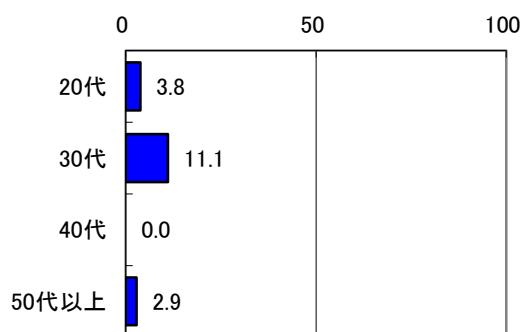


図34 自然体験活動に対するイメージ
「手軽な」

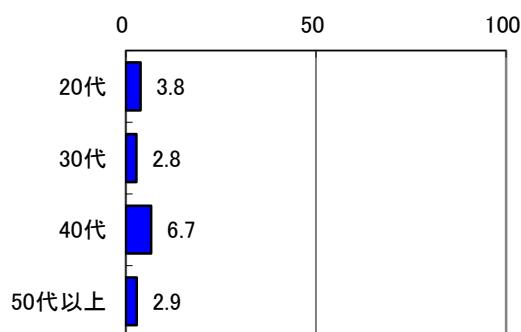


図35 自然体験活動に対するイメージ
「きたない」

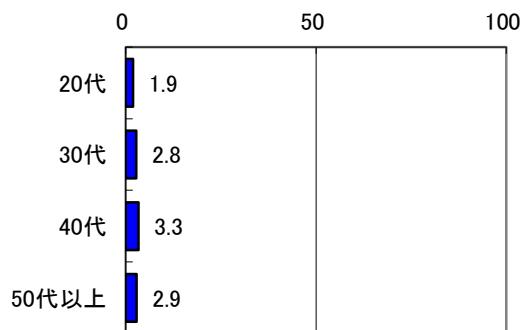


図36 自然体験活動に対するイメージ
「つらい」

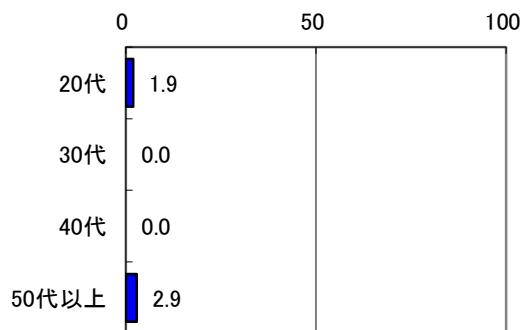


図37 自然体験活動に対するイメージ
「面倒くさい」

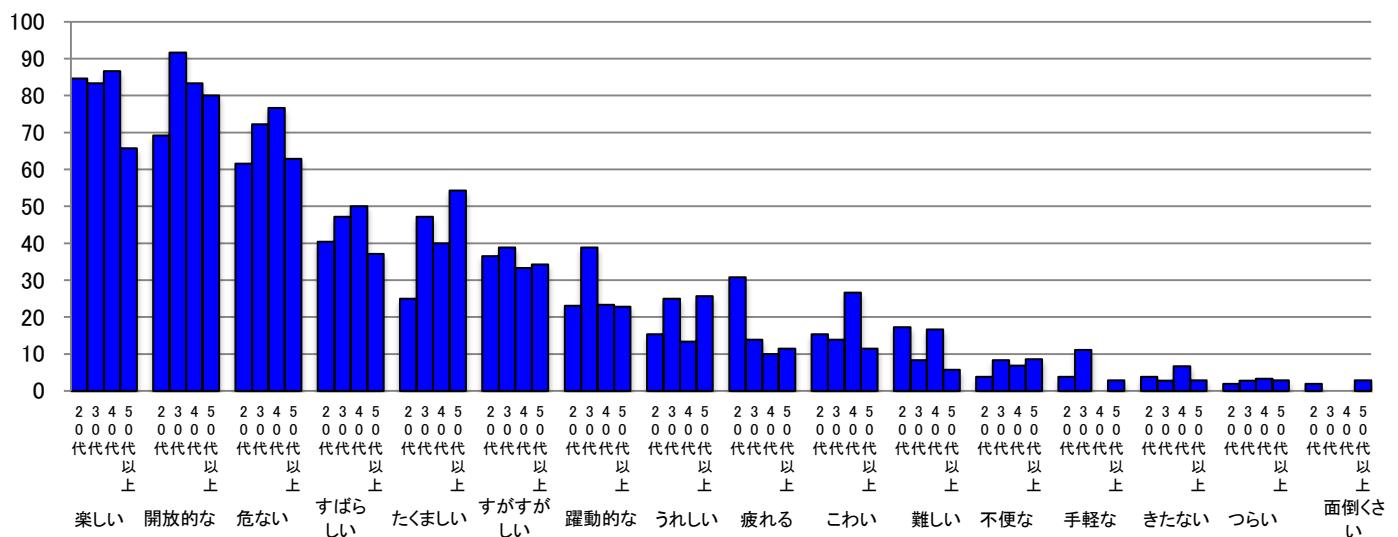


図38 自然体験活動に対するイメージ(年代別)

年代別にみてみると、30代、40代が、自然体験活動に対して肯定的なイメージがある傾向が見られる。

「楽しい」をあてはまると答えた割合は、50代以上が他の年代と比べて低くなっている。また、「疲れる」をあてはまると答えた割合は、20代が他の年代に比べて高くなっている。年代によるイメージの違いが少なからずあることがわかった。

【子どもにさせたい体験】

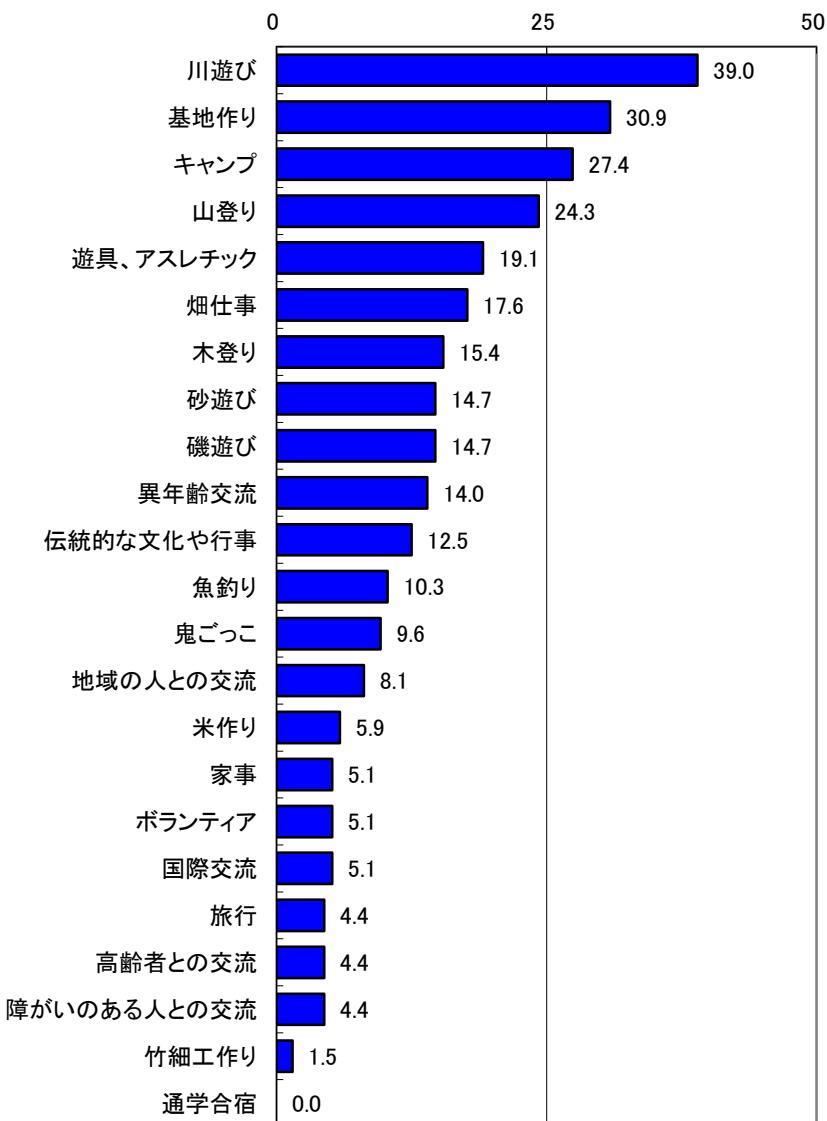


図39 子どもにさせたい体験

子どもにさせたい体験について、「あてはまるもの」を3つ選択する方式で質問した。「あてはまる」と答えた割合の高い順に、図39に示している。本質問項目は、平成24年3月に島根県立社会教育研修センターが発行した「家庭教育支援を行う人のための親学プログラム」を参考にしている。

「川遊び」、「基地作り」、「キャンプ」、「山登り」などといった自然と触れ合う活動が上位になっている。「遊具・アスレチック」といったある程度遊び方が決まっていたり、人の手で整備されている活動も上位に入っている。「国際交流」、「高齢との交流」といった交流を目的とする活動を答える割合は少なくなっている。

(年代別)

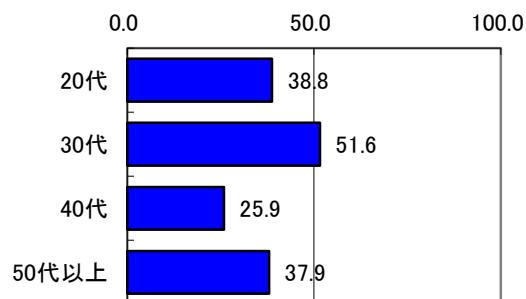


図40 子どもにさせたい体験
「川遊び」

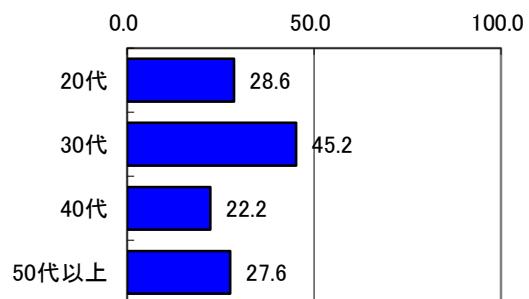


図41 子どもにさせたい体験
「基地作り」

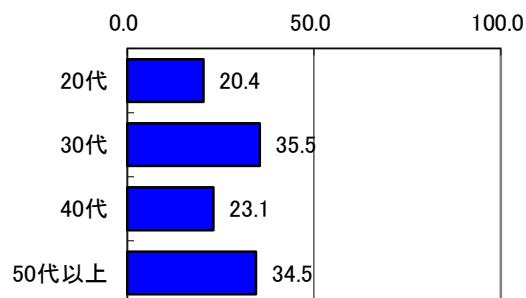


図42 子どもにさせたい体験
「キャンプ」

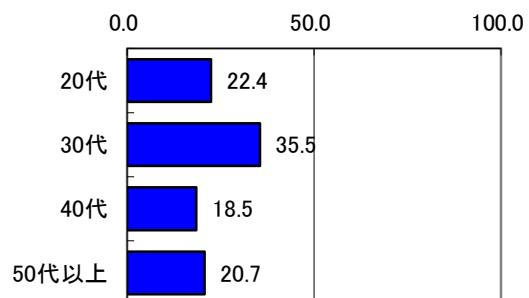


図43 子どもにさせたい体験
「山登り」

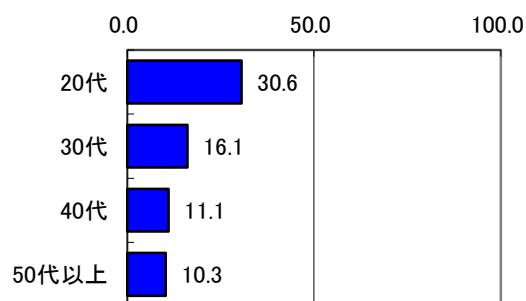


図44 子どもにさせたい体験
「遊具・アスレチック」

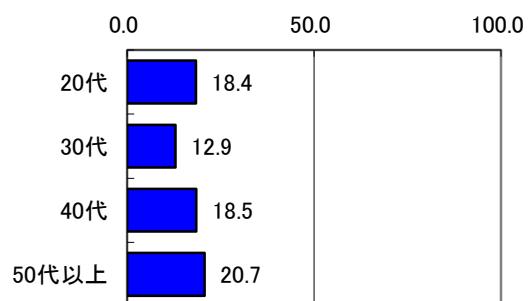


図45 子どもにさせたい体験
「畠仕事」

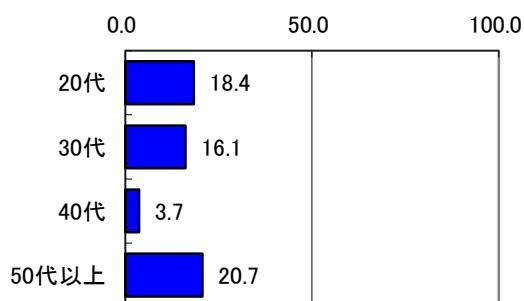


図46 子どもにさせたい体験
「木登り」

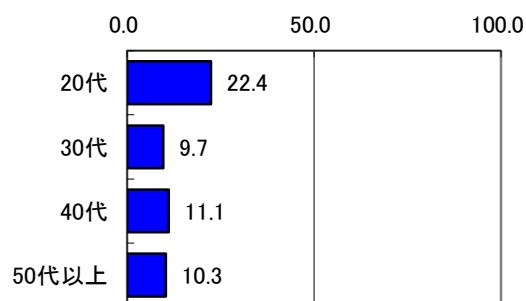


図47 子どもにさせたい体験
「砂遊び」

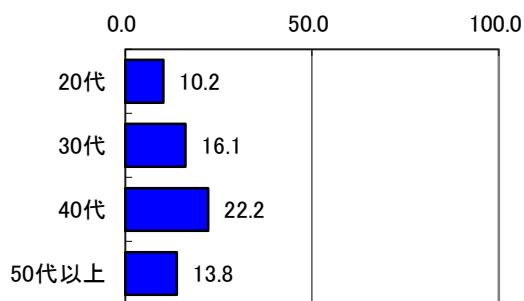


図48 子どもにさせたい体験
「磯遊び」

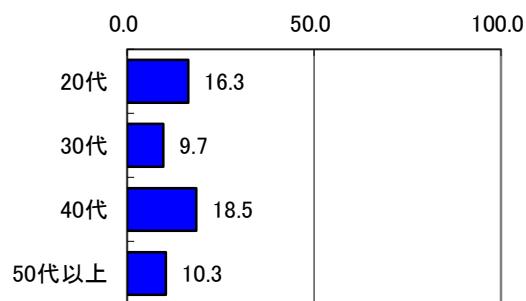


図49 子どもにさせたい体験
「異年齢交流」

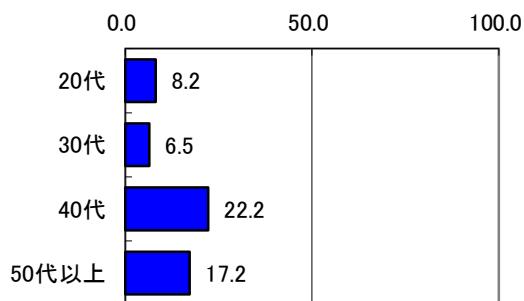


図50 子どもにさせたい体験
「伝統的な文化や行事」

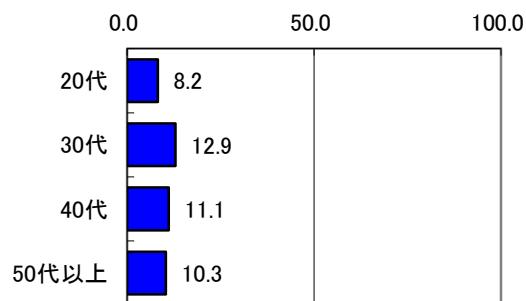


図51 子どもにさせたい体験
「魚釣り」

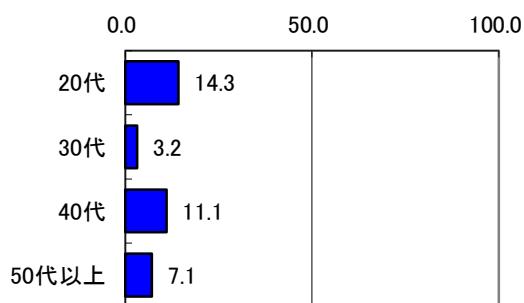


図52 子どもにさせたい体験
「鬼ごっこ」

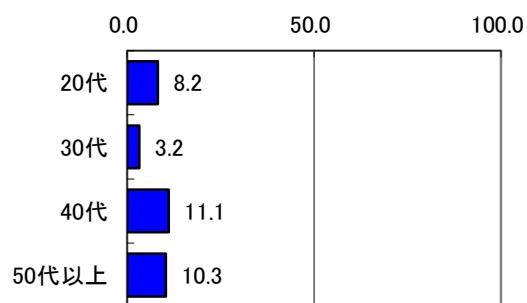


図53 子どもにさせたい体験
「地域の人との交流」

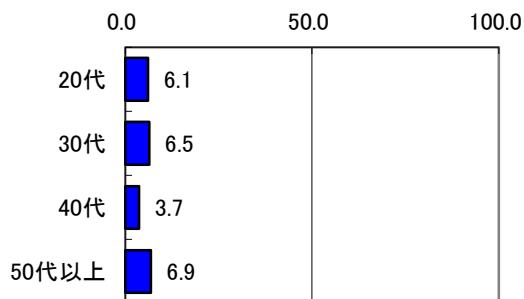


図54 子どもにさせたい体験
「米作り」

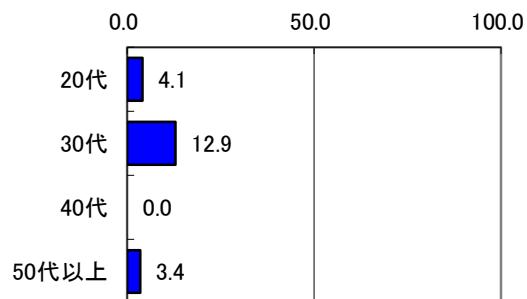


図55 子どもにさせたい体験
「家事」

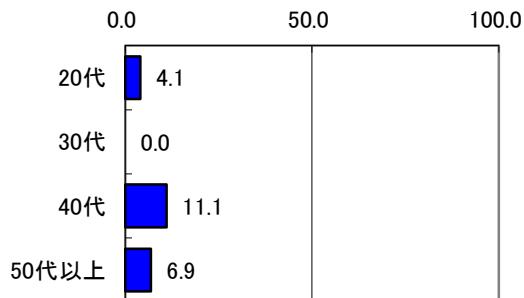


図56 子どもにさせたい体験
「ボランティア」

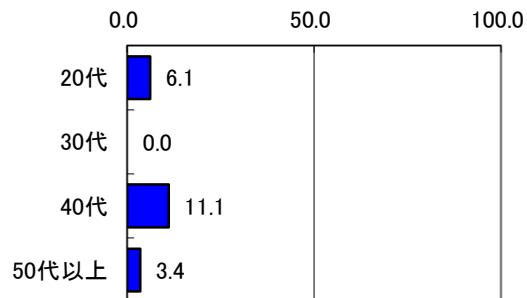


図57 子どもにさせたい体験
「国際交流」

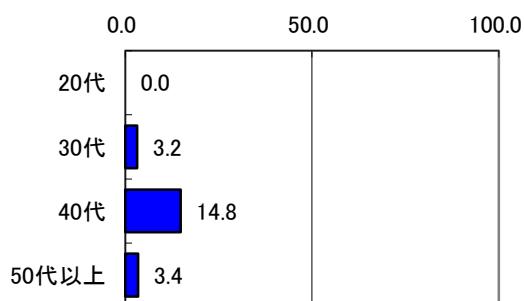


図58 子どもにさせたい体験
「旅行」

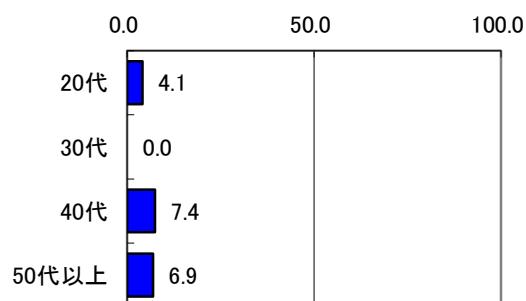


図59 子どもにさせたい体験
「高齢者との交流」

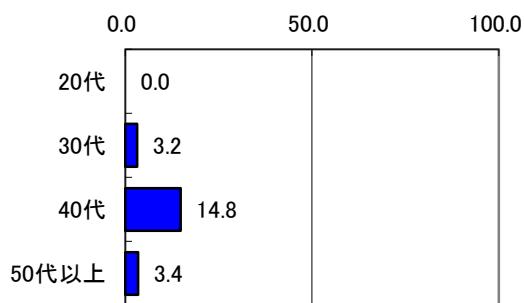


図60 子どもにさせたい体験
「障がいのある人との交流」

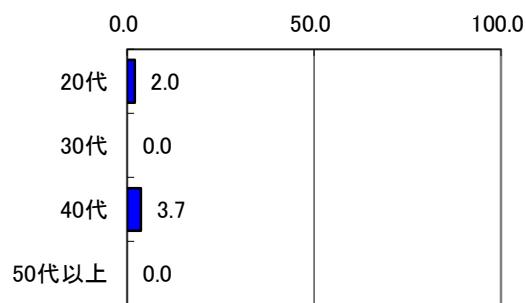


図61 子どもにさせたい体験
「竹細工作り」

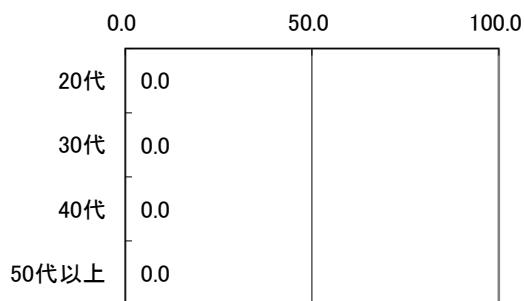


図62 子どもにさせたい体験
「通学合宿」

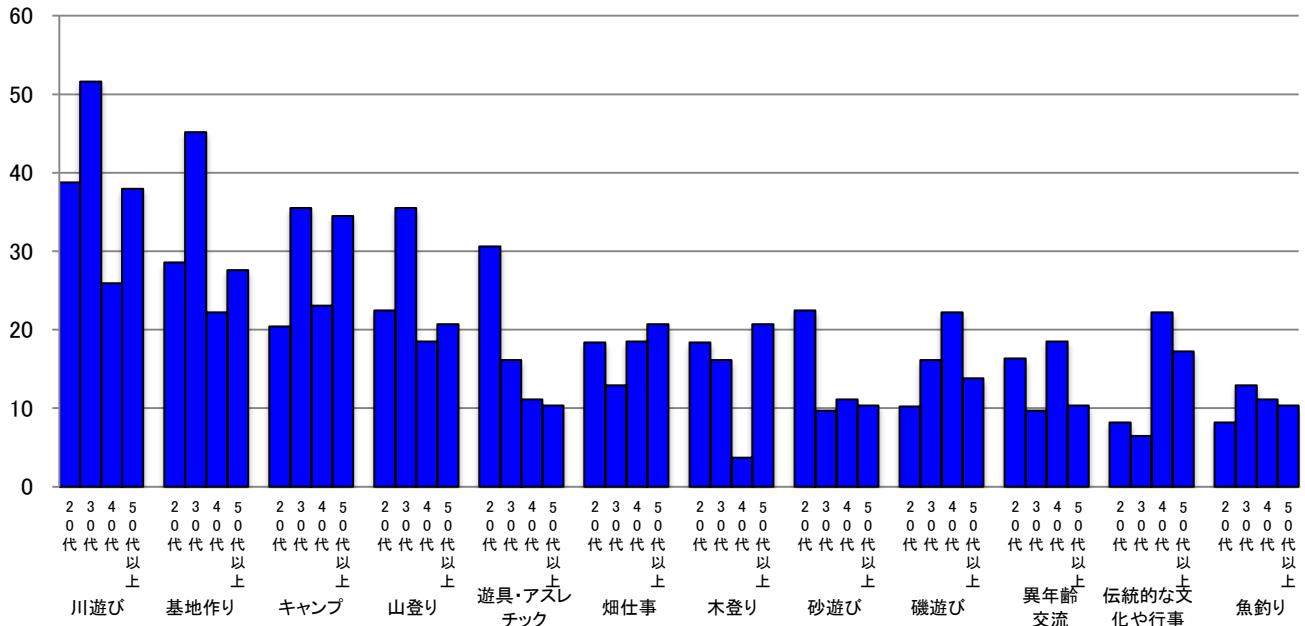


図63 子どもにさたい活動(1)(年代別)

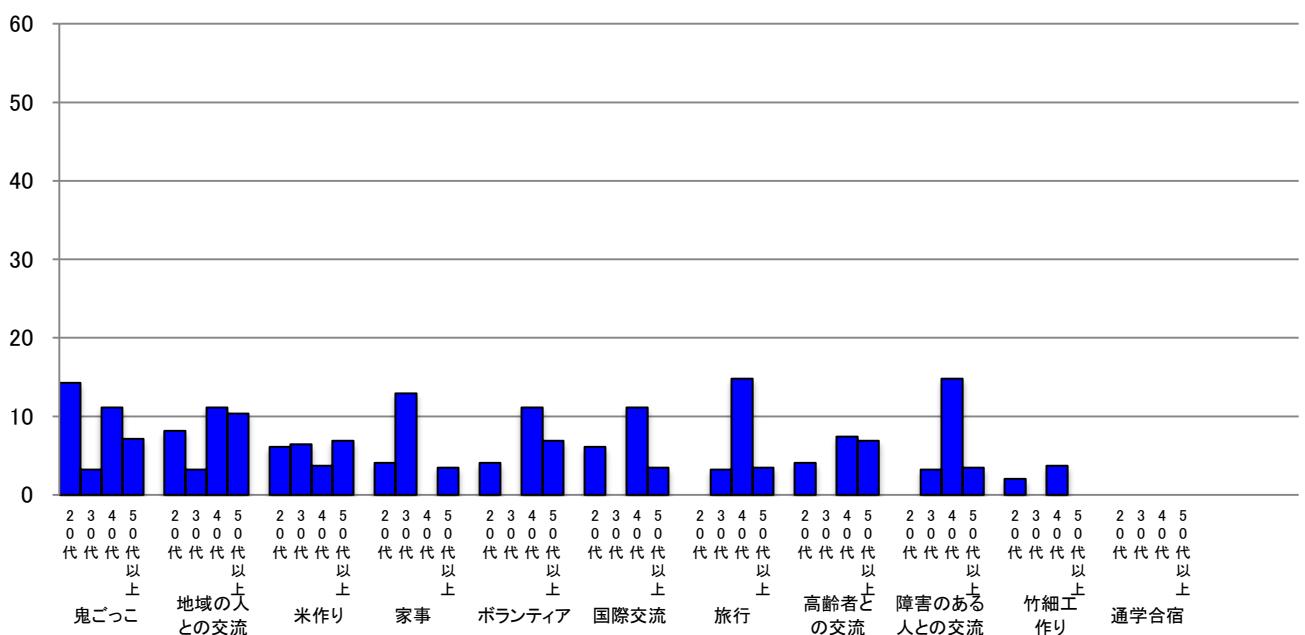


図64 子どもにさたい活動(2)(年代別)

年代別にみると、比較的世代が下であるほど、子どもにさせたい体験として、「川遊び」、「基地作り」、「山登り」といった自然体験活動を選んでいる傾向が見られる。以上の3つの活動は、特に30代が多く選んでいる。20代は、他の年代に比べて「遊具・アスレチック」、「砂遊び」といった活動を選んでいる割合が高い。40代、50代は、他の年代に比べて、「伝統的な文化や行事」を選んでいる割合が高い。

【幼児の自然体験活動指導者養成研修に関する期待】

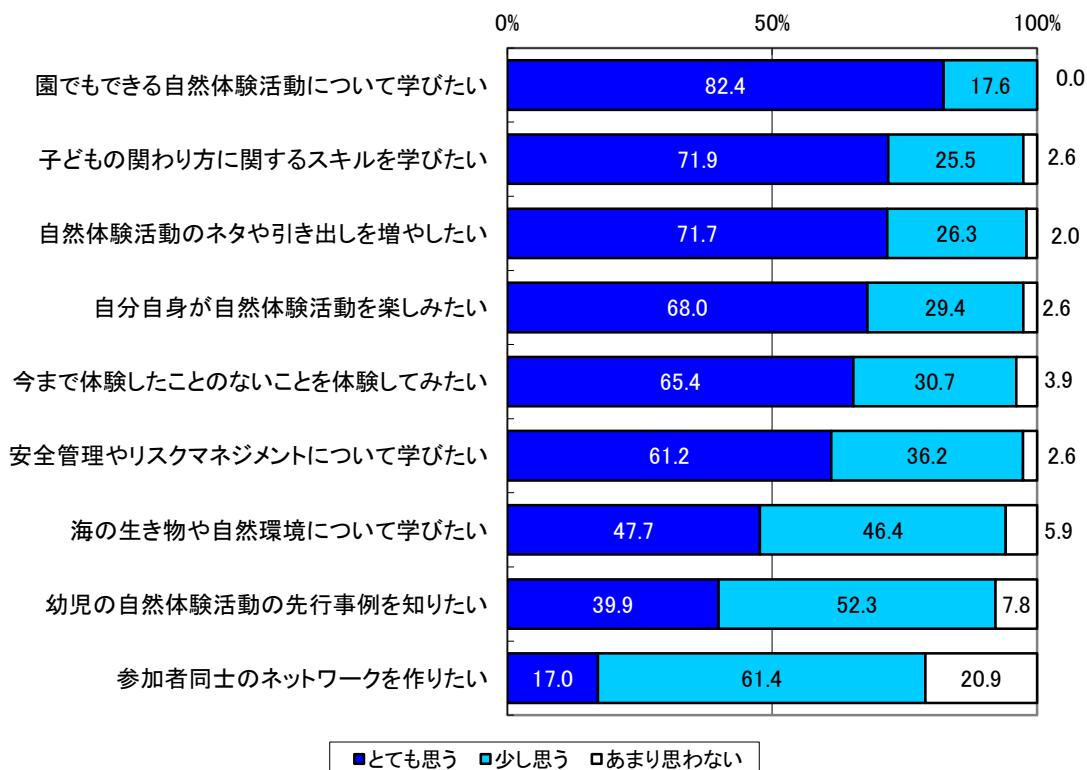


図65 幼児の自然体験活動指導者養成研修事業への期待

幼児の自然体験活動指導者養成研修でどのようなことに期待するかについて、9項目を設け、それぞれに対して「とても思う」、「少し思う」、「あまり思わない」、「全く思わない」の4件法で質問した。本調査項目については、当施設で検討した。「全く思わない」との回答はなかった。「とても思う」と答えた割合の高い順に、図65に示している。

「園でもできる自然体験活動について学びたい」、「子どもの関わり方に関するスキルを学びたい」、「自然体験活動のネタや引き出しを増やしたい」といったように、ふだんの子どもたちとの関わりの中で生かせることが上位にきている。

また、「自分自身が自然体験活動を楽しみたい」、「今までに体験したことがないことを体験してみたい」といったように、自分自身がまず、体験してみたいという項目も多くの人人が上げている。

(年代別)

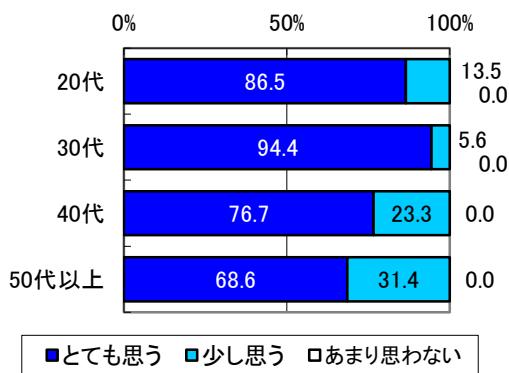


図66 園でもできる自然体験活動

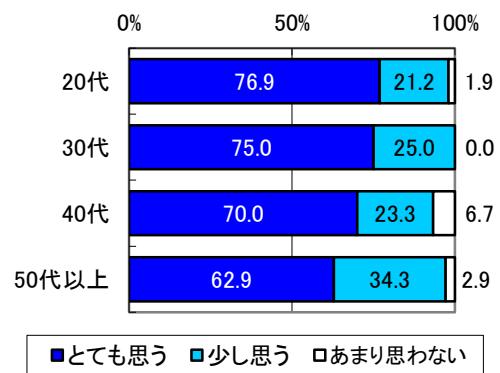


図67 子どもとの関わり方に関する

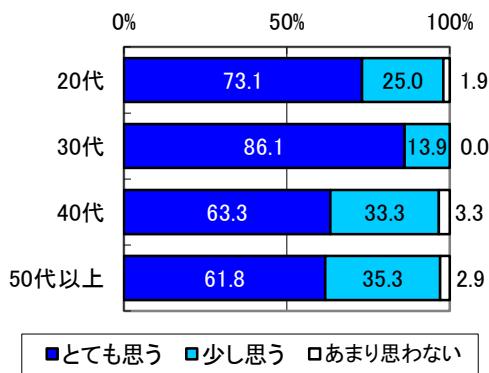


図68 自然体験活動のネタや引き出しを増やしたい

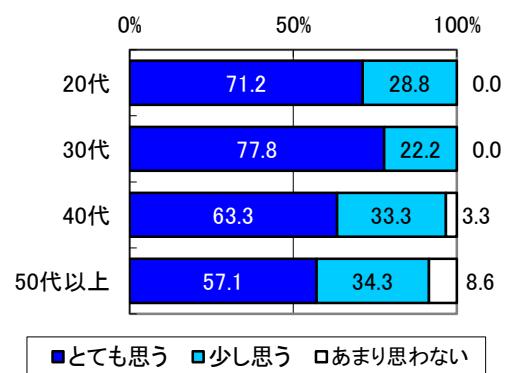


図69 自分自身が自然体験活動を

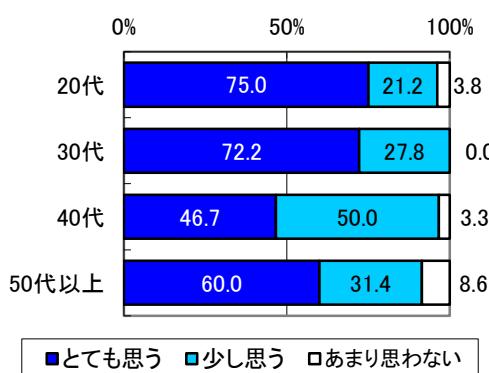


図70 今まで体験したことのないこと

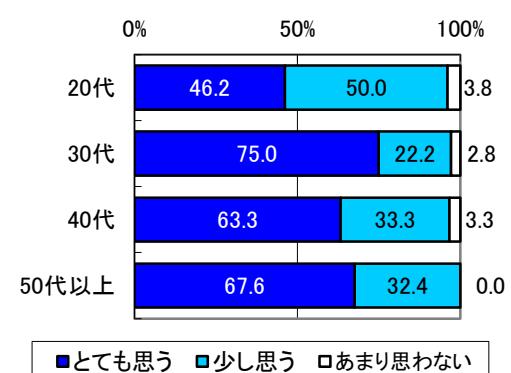


図71 安全管理やリクスマネジメントに

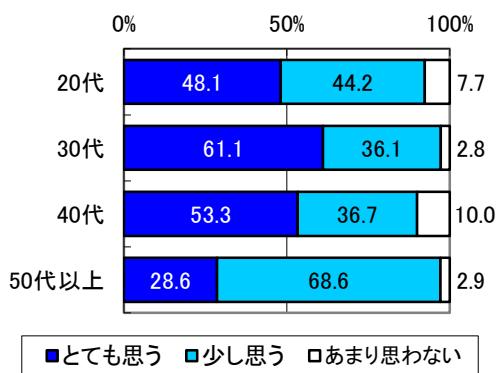


図72 海の生き物や自然環境に

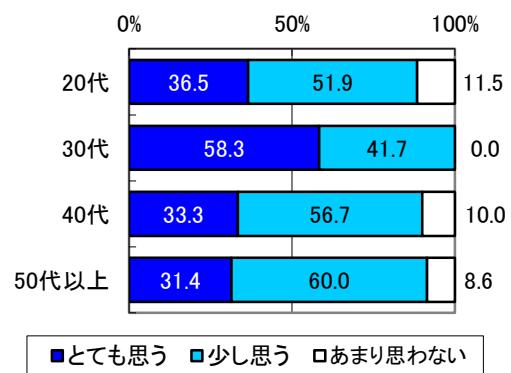


図73 幼児の自然体験活動の先行事例

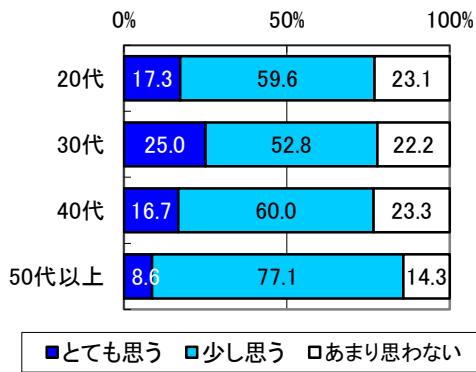


図74 参加者同士のネットワークを作りたい

年代別にみてみると、年代が下がるほど、研修に期待することについて「とても思う」と答える割合が高い傾向が見られる。一方で、「安全管理やリスクマネジメントについて学びたい」という項目については、年代が上がるほど、「とても思う」と答える割合が高くなっている。

【幼児の自然体験活動事業に関する期待】

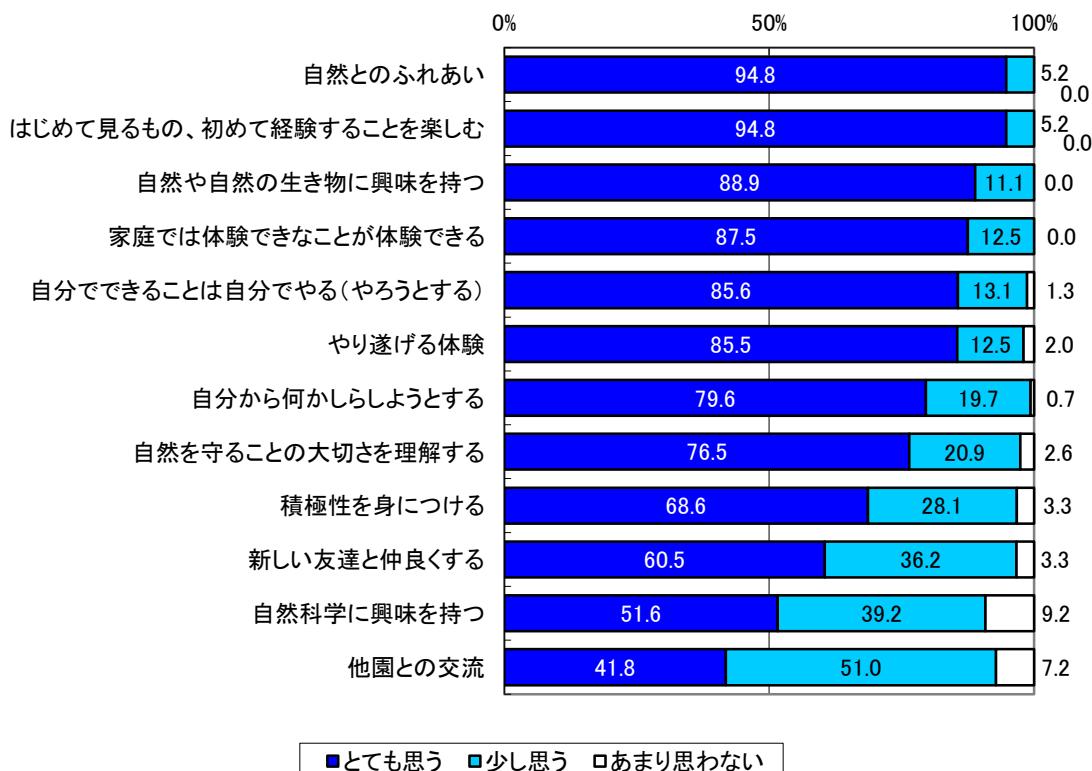


図75 幼児対象の事業「わかさわん うみはともだち」への期待

幼児を対象とした自然体験活動事業でどのようなことを期待するかについて 9 項目を設け、それぞれに対して「とても思う」、「少し思う」、「あまり思わない」、「全く思わない」の 4 件法で質問した。本調査項目については、当施設で検討した。「全く思わない」との回答はなかった。「とても思う」と答えた割合の高い順に、図 75 に示している。

「自然とのふれあい」、「はじめて見るもの、初めて経験することを楽しむ」、「自然や自然の生き物に興味を持つ」、「家庭では体験できないことが体験できる」の 4 項目については、すべての人が「とても思う」、「少し思う」と回答している。ふだんの生活やふだんの園での活動では体験することができないことを事業に期待していることがわかった。また、「はじめて見るもの、初めて経験することを楽しむ」とあるが、小浜市内の幼稚園・保育園の多くの子どもたちにとっては、当施設に来ること自体がほぼ初めてであろう。そうしたふだんとは異なる環境での活動で、子どもたちが新たな体験をすることを多くの人が期待していることがわかった。

(年代別)

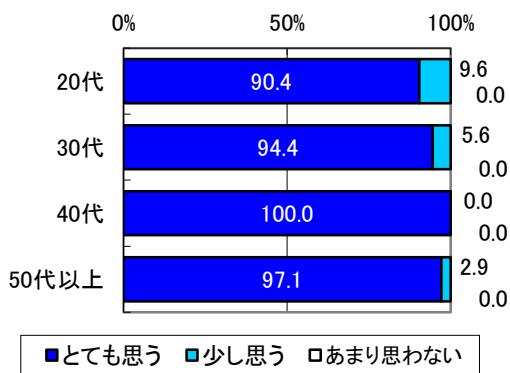


図76 自然とのふれあい

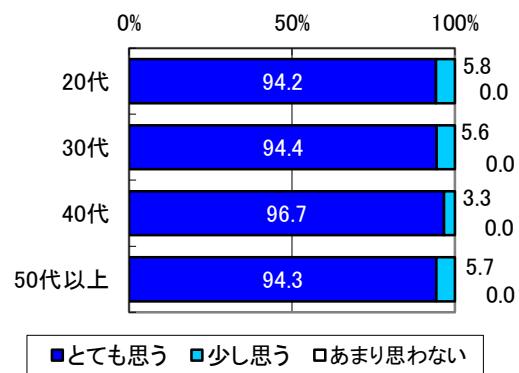


図77 はじめて見るもの、初めて経験することを楽しむ

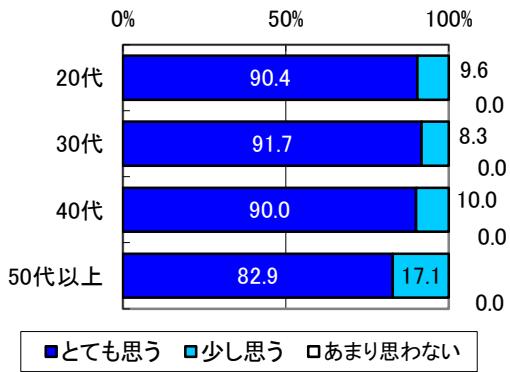


図78 自然や自然の生き物に興味を持つ

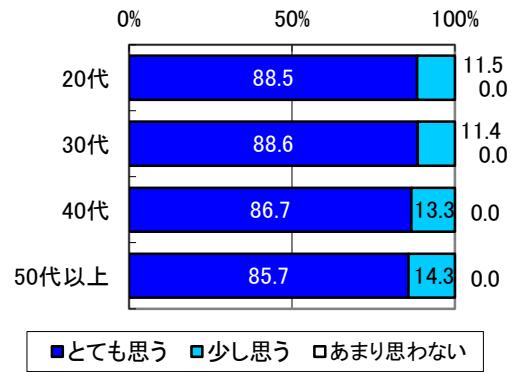


図79 家庭では体験できないことが体験できる

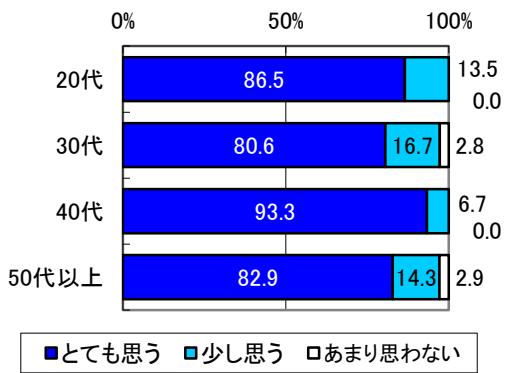


図80 自分でできることは自分でやる
(やろうとする)

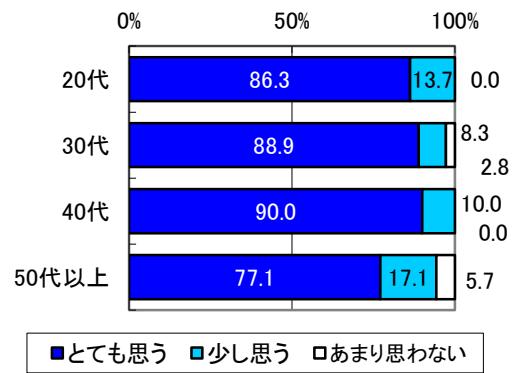


図81 やり遂げる体験

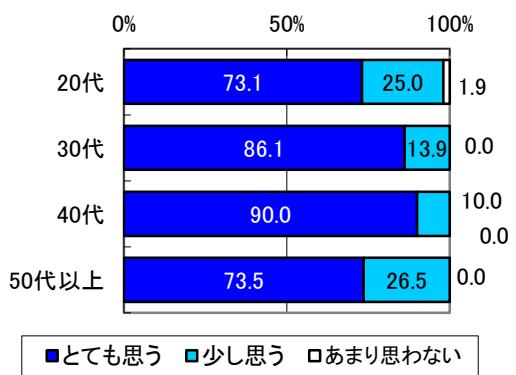


図82 自分から何かしようとする

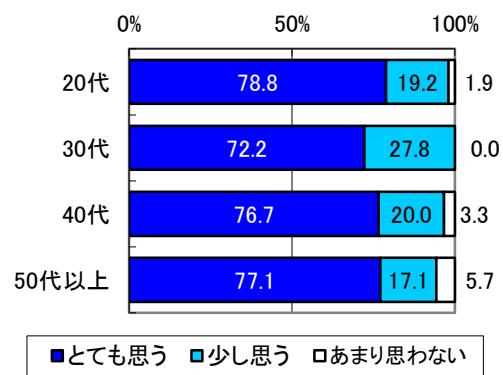


図83 自然を守ることの大切さを理解する

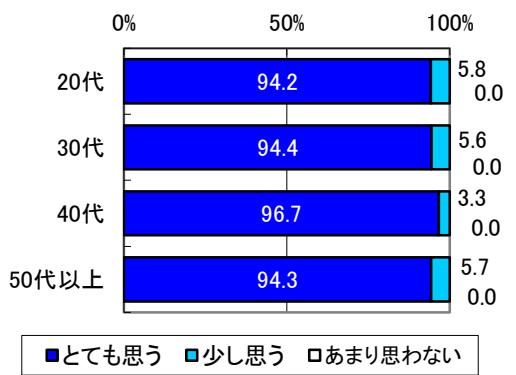


図84 はじめて見るもの、初めて経験することを楽しむ

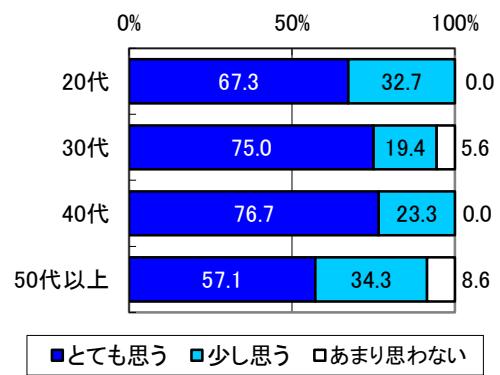


図85 積極性を身につける

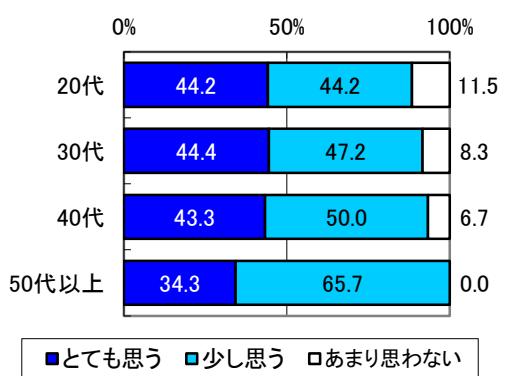


図86 他園との交流

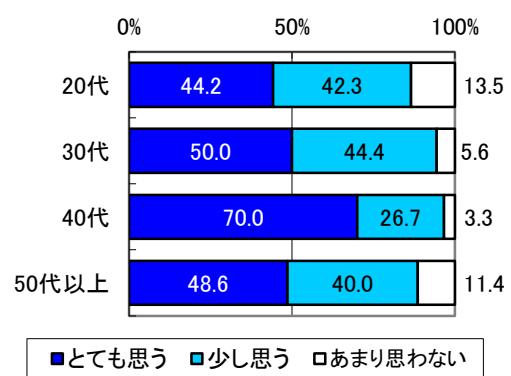


図87 自然科学に興味を持つ

年代別にみたところ、特に年代による違いは見られなかった。「自然とのふれあい」、「はじめて見るもの、初めて経験することを楽しむ」、「自然や自然の生き物に興味を持つ」、「家庭では体験できないことが体験できる」の4項目については、どの世代も「とても思う」と答える割合が非常に高くなっている。

【年代別にみたこれまでの自然体験の多寡】

表2. 年代別にみた自然体験の多寡(人)

	高得点群	中得点群	低得点群	合計
20 代	12	16	24	52
30 代	12	15	9	36
40 代	7	14	9	30
50 代以上	16	14	5	35
合計	47	59	47	153

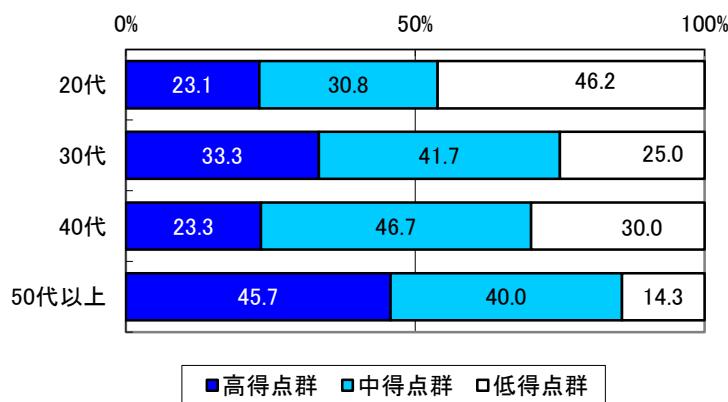


図88 年代別にみた自然体験の多寡の割合

これまでの自然体験についての 9 項目の回答を「何度もある」を 3 点、「すこしある」を 2 点、「ほとんどない」を 1 点と得点化して、これまでの自然体験の得点を算出した。その得点の平均と標準偏差を算出し、「平均+標準偏差の 2 分の 1」以上を「高得点群」、「平均-標準偏差の 2 分の 1」を「低得点群」、その中間を「中得点群」に分類した。

年代別にみた自然体験の多寡について、図 88 に示している。50 代以上は高得点群の割合が最も多く、20 代は低得点群の割合が最も多くなっている。国立青少年教育振興機構が発行した「子どもの体験活動等の実態に関する調査研究」報告書（平成 22 年）において、世代が下がるほど、自然体験が少ないとの結果が出ている。本調査においても、30 代と 40 代を比較すると必ずしもそうとも言えないかもしれないが、大きな傾向としては、同様の傾向が見られる。

【自然体験の多寡と自然体験活動に対するイメージの関係】

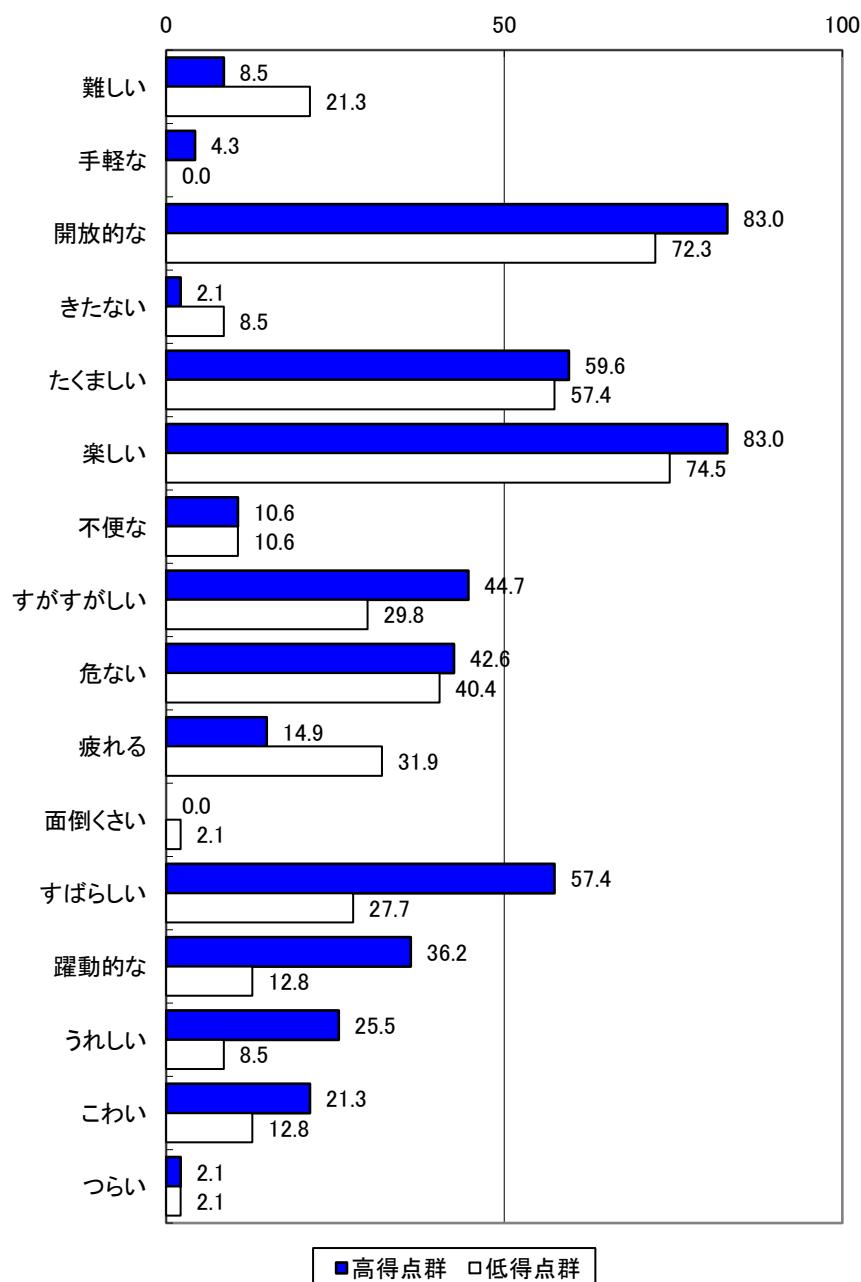


図89 自然体験の多寡と自然体験活動に対するイメージの関係

自然体験活動の多寡（自然体験の高得点群と低得点群のみを取り上げている）と自然体験活動に対するイメージの関係について分析し、その結果を図89に示している。

自然体験が多い人ほど少ない人に比べて、「すばらしい」、「躍動的な」、「うれしい」などといった肯定的なイメージを持っている割合が高いことがわかった。また、自然体験が多い人ほど少ない人に比べて、「こわい」、「危ない」といったイメージも持つ

ている割合が高いことがわかった。自分自身が体験することで、自然体験活動の良さも厳しさや怖さも感じることができるのであろう。

自然体験が少ない人ほど多い人に比べて、「難しい」、「きたない」、「疲れる」などといったイメージを持っている割合が高いことがわかった。自分が体験したことがないことは、難しいと思ってしまうのは当然なことであり、またマイナスのイメージを持つことも多いだろう。より多くの人たちが様々な自然体験をしてもらうことで、自然体験活動について肯定的なイメージを持ってもらうことができるのではないか。

【自然体験の多寡と子どもにさせたい体験の関係】



図90 自然体験の高得点群における
子どもにさせたい体験

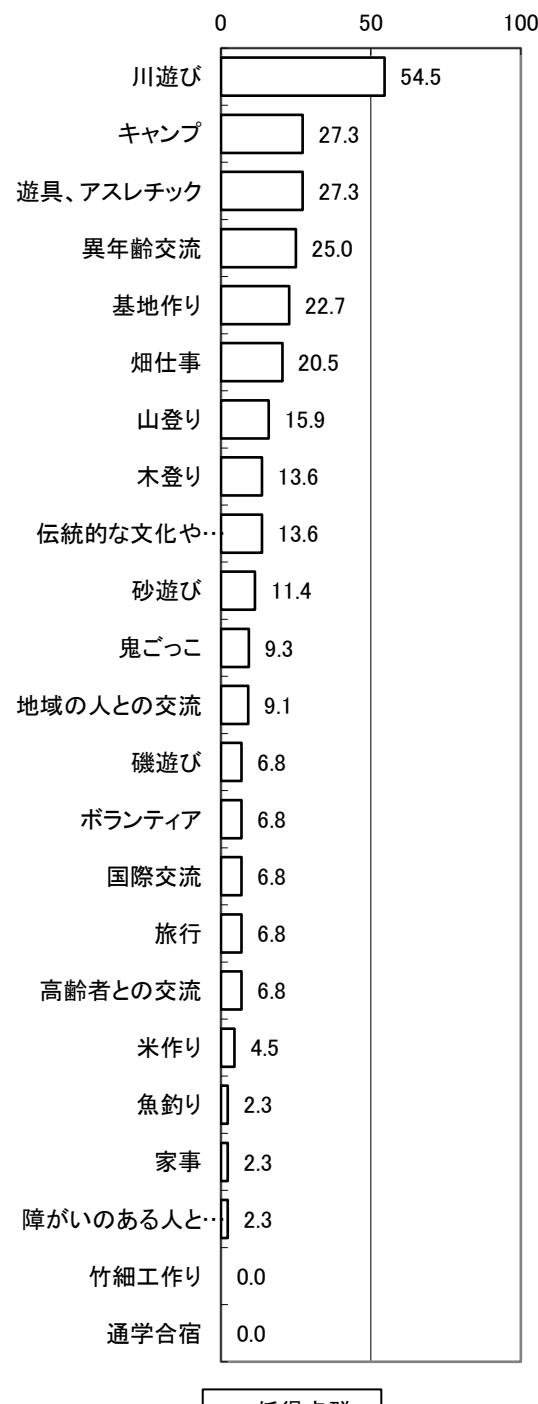


図91 自然体験の低得点群における
子どもにさせたい体験

自然体験の多寡と子どもにさせたい体験の関係について分析し、その結果を図90、図91に示している。

自然体験が多い群は、「基地作り」、「山登り」、「川遊び」、「磯遊び」、「遊具、アスレチック」などを選ぶ割合が高い。一方、自然体験が少ない群は、「川遊び」、「キャンプ」、「遊具、アスレチック」、「異年齢交流」、「基地作り」、「畠仕事」などを選ぶ割合が高い。

自然体験が多い群ほど、「基地作り」、「山登り」といった比較的ダイナミックな活動を選んでいる傾向が見られる。また、自然体験が少ないと、「遊具、アスレチック」や「異年齢交流」といった身近な場所でもできる活動を選んでいる傾向が見られる。

今年度、幼児の自然体験活動事業において実施を予定している海での活動である「磯遊び」や山での活動である「登山」については、自然体験が多い群に比べて、少ない群はさせたい活動として選んでいる割合が低い。一方、「川遊び」や「異年齢交流」については、自然体験が少ない群ほど多く選んでいる。「磯遊び」や「登山」海での活動や山での活動は、海や山自体は身近にあるが、幼児の活動として安全面の配慮などを考慮した時に、ハードルが高いと意識される活動であるのかもしれない。

【自然体験の多寡と幼児の自然体験活動指導者養成研修に対する期待の関係】

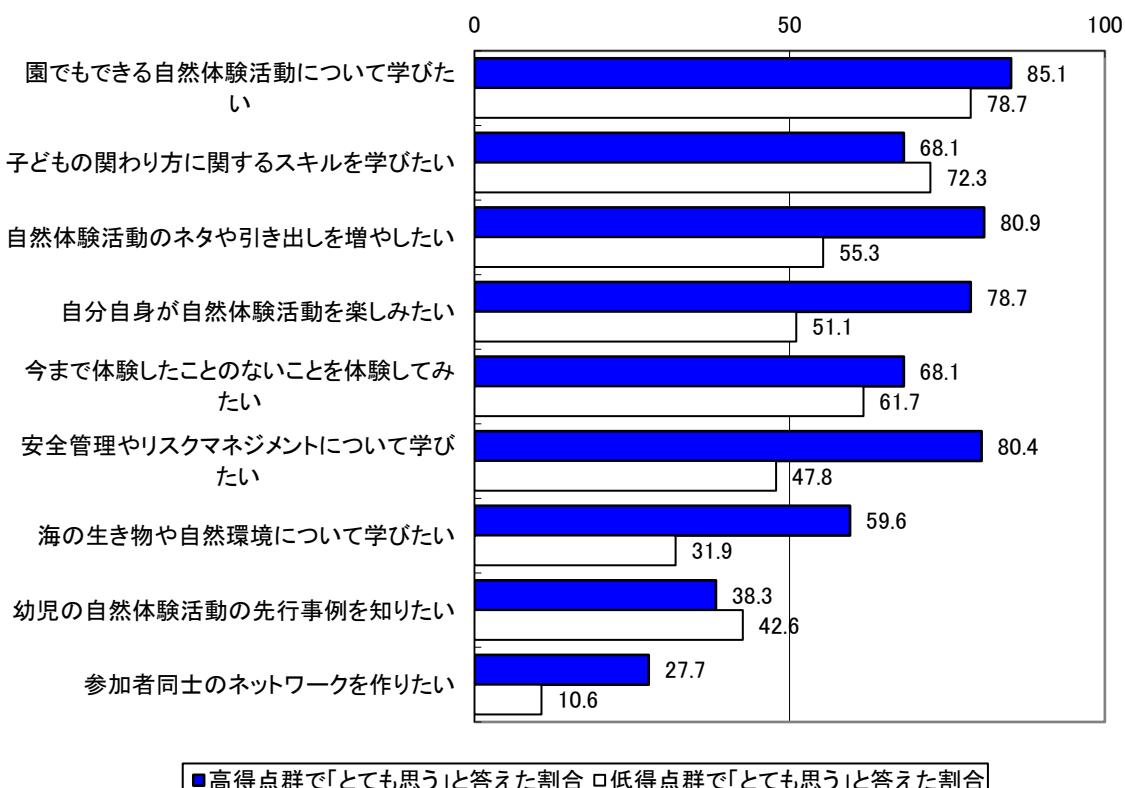


図91 自然体験の多寡と指導者養成研修への期待の関係

自然体験の多寡と幼児の自然体験活動指導者養成研修に対する期待の関係について分析し、その結果を図91に示している。

自然体験が多い人ほど少ない人に比べて、ほとんどの項目で研修に期待する割合が高くなっている。特に、自然体験が多い人ほど、「自分自身が自然体験活動を楽しみたい」、「安全管理やリスクマネジメントについて学びたい」、「自然体験活動のネタや引き出しを増やしたい」という項目に対する期待が高くなっている。

一方、自然体験が少ない人ほど、「幼児の自然体験活動の先行事例を知りたい」、「子どもの関わり方に関するスキルを学びたい」という項目に対する期待が高くなっている。自然体験が少ない人向けては、自然体験活動に対する知識や技術のみではなく、実際にどんな取り組みが行われているのか、幼児が行う自然体験とはどんなものなのかといった情報の提供をしていくこともニーズに合ったことであると考えられる。

【自然体験の多寡と幼児の自然体験活動事業に対する期待の関係】

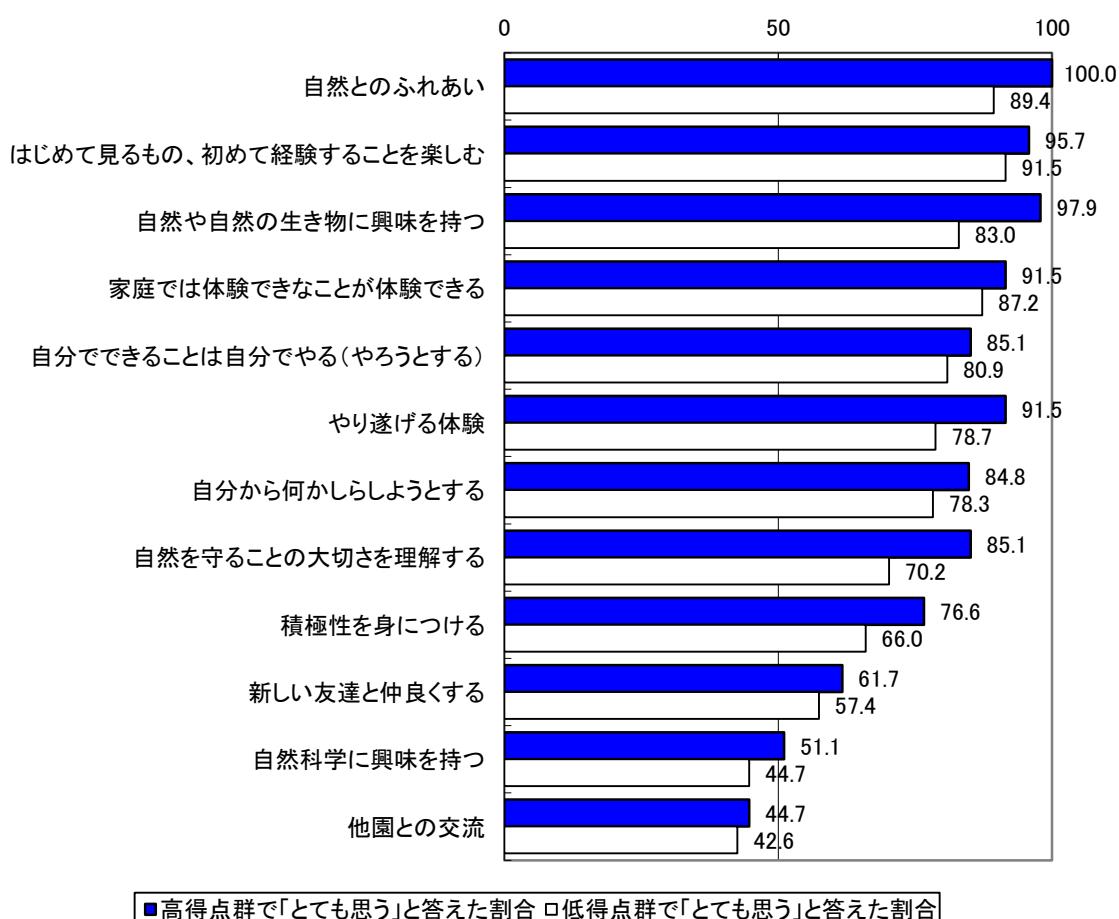


図92 自然体験の多寡と幼児の自然体験活動事業への期待

自然体験の多寡と幼児の自然体験活動事業への期待の関係について分析し、自然体

験の多い群と自然体験の少ない群において、「とても思う」と答えた割合を図9.2に示している。

自然体験が多い人ほど少ない人に比べて、すべての項目で「とても思う」と答えた割合が高くなっている。自然体験が多い人ほど、事業に対する期待が高いと言えるだろう。特に2つの群で「とても思う」と答えた割合の差が大きかった項目は、「自然や生き物に興味を持つ」、「自然を守ることの大切さを理解する」であった。自分自身が自然や生き物に興味を持ったり、自然を守ることを大切だと思ったりすることで、子どもたちに体験を通して、伝えたいと思うようになるだろう。

自然体験が豊富な人ほど、その効果や意義を感じており、事業を通して様々なことを子どもたちにも学んでもらいたい、子どもたちに体験を通して成長してもらいたいと思うのではないだろうか。

3 調査のまとめ

国立若狭湾青少年自然の家 企画指導専門職 斎藤 雄

小浜市内の保育士、幼稚園教諭等のこれまでの自然体験の経験や日常生活の中での経験、自然体験活動に対するイメージや子どもにさせたい体験、本年度実施する幼児の自然体験活動指導者養成研修と幼児の自然体験活動事業の2事業に対する期待などを調査し、小浜市内の保育士、幼稚園教諭等の自然体験活動の現状を明らかにし、今後の事業展開の参考にするため、本調査を実施した。

小浜市のある若狭地域は、日本海に面しており、山も近く、泳げるような川がいくつも流れしており、全国的にみても大変自然が豊富な地域である。そのような地域で暮らす小浜市内の保育士、幼稚園教諭等は、青少年教育振興機構が実施した全国調査と比べて、全体的に自然体験が豊富な傾向が見られる。しかしながら、世代が下がるほど体験が少ない傾向もみられる。全国調査において、成人は世代が下がるにつれて体験が少なくなること、また、子どもは都市部や郡部などの居住地による体験の差がほとんどないことなどが明らかになっており、自然豊かな小浜市においても、こうした全国的な傾向と同様の傾向が見られるようである。様々な体験の機会を増やす取り組みをしていくことは、こうした自然豊かな小浜市においても、必要なことであると考える。

自然体験活動に対するイメージについては、全体的に肯定的なイメージを持っており、自然体験が豊富なほど、その割合は高くなっている。また、「こわい」、「危ない」を選ぶ割合も高くなっている。一方、自然体験が少ない人ほど、自然体験活動に対するイメージは「難しい」、「疲れる」といったように、ハードルが高い活動と感じている傾向がみられる。

自分自身が体験したことがないことは、どうしても難しいと考えてしまうものだろう。しかしながら、多くの人は、自然体験活動は「楽しい」、「開放的」であり、「たくましい」ものだと感じている。こうした肯定的なイメージがある自然体験活動について、「難しい」し、「疲れる」けれども、子どもたちにとって成長の機会となるから子どもたちにさせてあげたいと多くの人に思ってもらうためにも、どのような取り組みをしていくのがよいか、今後も事業を継続する中で、検討をしていきたい。

子どもにさせたい体験については、自然と触れ合う活動を選ぶ割合が高くなっています。その傾向は世代が上がるほど見られる。世代が下がるほど、「遊具、アスレチック」を選ぶ割合が高くなっている。自然体験が豊富な人は、「基地作り」、「山登り」といったダイナミックな活動を選ぶ割合が高く、自然体験活動が少ない人は、「遊具、アスレチック」、「異年齢交流」といったと、比較的身近な活動を選ぶ割合が高くなっている。

子どもたちにさせたい体験として自然体験を積極的に選ぶのは、体験が豊富な人である。自然体験が豊富な人ほど、そのよさを知ると同時に、危険性なども理解しているため、こうした結果になっていると考える。幼児の指導者養成研修に対する期待として、「安全管理やリスクマネジメントについて学びたい」という項目に関しては、体験活動の多寡による差が大きく見られた。子どもたちに安心して活動をしてもらうためにも、安全管理やリスクマネジメントの意識を高めていくことは、重要なことである。保育士や幼稚園教諭に積極的に体験の機会を提供する中で、こうした安全に対する意識を高めつつ、指導者自身に対する体験の機会を提供していくことが有効的な取り組みであると考えている。

幼児の自然体験活動事業に対する期待は、非常に高いものであった。自然が豊かな地であっても、自然体験をすることはふだんの園での生活の中では、させたい活動の上位にあるような「川遊び」、「基地作り」、「キャンプ」、「山登り」はなかなか難しいことだろう。本年度実施する幼児の自然体験活動事業では、特に、海での活動を検討している。ある保育園の先生からは、ふだんの保育の時間の中で、浜に遊びに行くことはあっても、海に入らずに、浜辺を散策するぐらいしかできていないと聞いた。数人で大勢の子どもたちの安全確認をすることが難しく、海に入ることができないとのことであった。目の前に見えている海であっても、そこで活動をするためには様々な配慮が必要である。こうした機会を当施設が積極的に提供していくことは、意味あることであると考えている。

こうした調査結果を踏まえ、本年度より実施する幼児の自然体験活動指導者養成研修と幼児の自然体験活動事業「わかさわん　うみはともだち」につなげていきたい。

幼児の自然体験活動指導者養成研修については、指導者自身がまずは参加者となって、自然体験を思う存分してもらい、その楽しさや面白さ、危険性などについて、体験を通して学んでもらいたいと考えている。調査結果にあるような、体験の不足を補えるように、また、指導者自身に自然に対する原体験を得られるきっかけとなるように、その内容を検討していくこととしている。

幼児の自然体験活動事業「わかさわん　うみはともだち」については、どのような遊びをするのか、またどのように海と触れ合うのか、当施設としてもはじめての事業であるので、安全管理体制を整え、活動場所をある程度制限し、その中で子どもたちを海に放つてみたいと考えている。また、海だけではなく、当施設の特色でもある海と山が背中合わせになっている環境を活かし、山に入る活動も取り入れるようにしている。

2 事業を通して、自然体験活動に理解ある人を増やすとともに、子どもたちが自然に触れ合える機会を提供していきたい。こうした取り組みを通して、地域に自然体験が根付き、この自然豊かな地域がよりよい教育の場となっていくことを願う。